



TITLE:

後漢末の世相と巴蜀の動向

AUTHOR(S):

狩野, 直禎

CITATION:

狩野, 直禎. 後漢末の世相と巴蜀の動向. 東洋史研究 1957, 15(3): 281-308

ISSUE DATE:

1957-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145891>

RIGHT:

東洋史研究

第十五卷第三號 昭和卅二年一月發行

後漢末の世相と巴蜀の動向

狩 野 直 禎

一

秦漢時代が古代帝國による統一の時期であるとすれば、その後を承けた魏晉南北朝時代は分裂の時期である。天子の政治的權力は廣大なる莊園を所有し、代々高官を世襲する門閥貴族の蔽うところとなった。天子はこれら貴族達の地位や利益を保證し、彼等の爲の社會秩序を守るものたるべく貴族群から要望された。勿論天子は天子となった以上、中央集權化を志向する。併し貴族との間に摩擦を生じ、その支持を失つて了えば没落してしまふ外はない。こうして貴族達は個々の家について見れば、盛衰興亡はあつても、全體としては社會の中心勢力としての地位を、唐代中期頃まで持ち續けるのである。尤も、北朝では異民族の天子が君臨したため、その勢力は南朝と同一に論ずることはできないものがある。しかし概括的にいえば、この時代は、貴族制時代とも呼びうるものであり、この貴族制の上に、いわゆる六朝文化の美しい花も開くわけである。

さてこの六朝の貴族の系譜は、後漢時代の地方の豪族に求められるようである。これらの豪族はほぼ後漢一代を通じてその勢力を伸していったのである。南北朝の門閥貴族もその家系をたどると、この後漢時代に擡頭・成長期が求められるようである。¹⁾これら地方の豪族は、後漢王朝の力が衰えて、異民族の侵入や、農民の叛亂（その最も大きいものは黃巾

の亂であるが）等が起ると、その既得の利益を守る爲に自衛組織を作ったり、或は彼等を保護しうる實力者を推戴して安定を圖るようになる。こうして二世紀の末には漸く分裂のすがたは極めてはっきりしてくる。そして三世紀に入ると遂に三國の鼎立狀態が産み出される。これらの國々は何れも地方豪族の協力なしには成立し得なかつたのである。⁴⁾⁵⁾次に簡単に文化面の變化について考えてみたい。

六朝文化は漢代文化の傳統の上に立っていることはいうまでもないことであるが、一方にはまた非常に異つた性格をも示すのである。それは一言にしていえば、儒教思想からの獨立ということになると思う。宇都宮氏は、このことを「政治性」と「自律性」という二つの語で示されている。（『東洋中世史の領域』東光二、漢代社會經濟史研究 一九五五 弘文堂所収）

まず學術思想について見てみよう。漢代の思想界は、武帝が儒家思想を國教として採用して以來、儒教一色に塗り潰されてしまった。その上學問は師弟相授・一經（寧ろ一家）専門で、その間に自由な批判が許されず數經兼習は從つてむずかかった。それ故に思想内容の發展が望まれず、訓詁の學は煩瑣なものとなり、僅か數個の文字に數萬言を費すありさまであつた。（桓譚 新論・漢書卷三十藝文志注引）又、學問が利祿の道と直結したために墮落し形式化する。そこで後漢時代に既に王充のように儒教の現状について嚴しい批判を下すものもでてゐるし、また後漢末の馬融、鄭玄は、一經専門の枠を越えて、經書全體に通じ、漢代訓詁學の大成者の榮を受けた。併し一般的に見れば兩漢の學問にはそう大きな變化は見られない。所が魏晉時代に入ると學風は大いに變化した。それは老莊思想の研究が行われ始めたことで、何晏・王弼らは老莊思想で儒家の經典を解釋した。しかしなお王弼には「孔子を無の體得者とみなし、老子ははまだ有の段階にある」（世說新語）として、老子の上位に孔子を置く態度が見られるが、次に出た阮籍、嵇康ら「竹林の七賢」と呼ばれる人達は儒家の固苦しい形式化した禮教を罵倒し、阮籍のように、禮教主義者を白眼視し、禪中の蟲にたとえる（世說新語）ものさえ出る。かくて老莊思想の研究は盛となり、玄學は四學の一に數えられるようになる。

次に文學についてみると、漢代には、例えば詩經の詩の序に見られるような——詩經開卷第一の關雎の詩の序中、左に示す一節に端的に現わされている——儒家の道義主義的文學思想が盛行していた。即ち關雎の詩序には次のように言う。

「得失を正し、天地を動かし、鬼神を感じしむるは、詩より近きはなし。先王是を以て夫婦を經め、孝敬をなし、人倫を厚くし、教化を美しくし、風俗を移す」

所が、魏晉時代に入ると、文學思想にも大きな變化が現われてくる。それは次の曹丕（魏の文帝）の「典論」論文篇の語に示される。

「蓋し文章は經國の大業にして不朽の盛事なり。年壽は時ありてつき、榮樂はその身に止る。二者は必至の常期あり、いまだ文章の無窮にしかず。こゝを以て古の作者は身を翰墨によせ、意を篇籍に見わし、良史の辭をからず、飛馳の勢に託せず、しかも聲名自ら後に傳う。」

かくて文學はその無窮の生命が認められ、文藝至上時代に入る。そして文學も亦四學の一に數えられるのである。

又曹丕は、父曹操らと共に五言詩を文學のジャンルの中に確立した人でもある。この五言詩の詩形は吉川氏によれば民間の歌（樂府）として出發したもので、伴奏音樂を伴い、いわゞ歌謡曲であつて、それは宴會の席上では士人階級の間に愛好されたとしても、直接彼等が作詞の筆をとるということはなかつたものである。曹操や曹丕・曹植が、或は建安の詩人たちが、この種の作詞に従事し、終に五言詩の詩形を文學のジャンルの一として確立した事は、確に文學史上極めて注目すべき變化といわねばならないであろう。それと共に、これは又音樂史上にも一つの問題を提起するのではないであろうか。それは何かというと、古樂と新樂の問題である。古樂とは先王の制した樂であり、新樂とは世俗に流行する樂である。儒家の立場から言へば勿論古樂こそ尊ぶべきものである。漢代では言う迄もなく、音樂の上にも儒家の勸戒主義が支配力を持っていた。例えば馬融は、論語の「樂と云い樂という。鐘鼓を云わんや」（陽貨）に注して、

「風を移し俗を易うるなり」

といっている。所が、こゝに樂府の詞が士人達によつて作られると、これにつれてその詞の伴奏である音樂も自然その價值が認められたことになる。それは古學を是とし、勸戒主義を標榜する儒家の音樂思想に對するものである。嵇康は「聲無哀論」を著して、儒家の道義的樂論を排して、音樂其物の性質を成るべく純粹に見ようとする。こうして六朝時代は、西方音樂の流入と相俟つて、音樂も亦發達を見るのである。

更に繪畫についてみると、これも亦同様に漢代は勸戒主義で貫かれ、實用性の制約から脱することはできなかった。繪畫が藝術として獨立を認められるに至つたのは魏晉時代に入つて、士人階級が自ら彩管を取るに至つてからのことである。最後に宗教について一言する。佛教が中國に傳來したのは前漢時代とも後漢時代ともいわれている。それはともかくとして佛教が廣く信仰され、佛教の教理が盛に研究され始めたのはやはり魏晉以後のことであるようだ。この理由は種々考へられようが、私はその一として、やはり儒教精神の衰退を考へてよいように思う。家族制度の維持を根本理念とする儒教の世界觀が支配する時代に、出家修行を説く佛教が全面的に受容されることは困難であらうと思うからである。森氏や大淵氏が指摘されているように、佛教の急速な發展は、魏晉頃より現れて來た人間主義・個人主義的傾向による所大であると思う。

以上私は秦漢時代の政治及び文化上の變化について非常に概括的な展望をなした。私は以上のことから、二世紀末から三世紀(後漢末〜三國)にかけての時期に、中國史上には一つの轉換期が求められてよいように思う。

二

二世紀末〜三世紀というと巴蜀地方では、劉焉が益州牧になった頃(中平五年・一八八年)から、劉備の蜀漢國建國に至る期間であり、この地方の豪族が自己の地位の安定を求めて激しい動搖を示していた時期であつた。今この時期の巴蜀の狀態について述べられている言葉を一、二拾つてみる。

「益州は險塞にして、沃野千里、天府の土なり。高祖これによつて以て帝業をなす。劉璋は闇弱にして張魯は北にあり。

民殷にして國富むも、而も存恤するを知らず。智能の士は明君を得んことを求む」(三國志蜀志卷五 諸葛亮傳)

これは劉備が建安十二年(二〇七)いわゆる「三顧の禮」を以て諸葛孔明を軍中に迎え、これに漢室復興の志を述べてその計策を問うた時、孔明が對えて説いた「天下三分の計」の一節である。

次に

「米賊張魯據りて巴漢に王たりて、曹操の耳目となり益州を規圖す。劉璋は不武にして自ら守ることあたわず、もし操にして蜀を得ば則ち荊州危し。今先ず攻めて璋を取り、進んで張魯を討たんと欲す。首尾相連りて吳楚を一統せば、十の操ありと雖も、憂うる所なきなり。」(三國志蜀志 卷二、劉先主傳注引獻帝春秋)

これは吳の孫權が周瑜の進言によつて蜀を取らんとし、建安十五年(二一〇)使者を劉備の下に遣して、行動をとものにせんことをすゝめしめたときの言葉である。然るに、この時劉備は自ら蜀を圖る氣持があつたため、このすゝめを退け、その後の態度にもかなり強硬なものがあつたので、吳はこの計畫を放棄した。劉備が入蜀したのはその翌年建安十六年(二一一年)のことである。

さてこれらの言葉が示すように、益州の政治情勢は頗る安定を缺いていた。すなわち漢中一帯には張魯があり、益州牧を稱する蜀の劉璋と相對立していた。そして人々はそのよる所を模索している。故にこの地は曹操・孫權・劉備の各々から狙われていた。この中から劉備が益州をとり、蜀漢國を建てるわけだが、その具體的な經過について述べる前に、こうした混亂を生じた一般的情勢について考えてみたい。本篇の目的も自然そこに存する。

三

順帝の時というから二世紀の中葉に當るが、沛國の人張陵なるものが、蜀の鵠(鶴とも)鳴山に來て修行し、五斗米道(天師道)と名づける宗教を編み出した。先に引いた吳の使者の言葉の中に「米賊張魯」とあるその米は、五斗米道の略なのであり、張魯は實に陵の孫に當る。

さて、この當時の資料にしば／＼鬼道・妖道・巫道などという言葉が見え、又妖賊などという語も散見する。これらの語は何れも符水呪術による治病を目的とし、民間信仰の母胎から生れた宗教を指しているものであろう。しかもそれが民間信仰に根ざすものである以上、その固有の地方文化との關聯も豫想される。五斗米道の發生した蜀の地方には

「次王を魚鳧という、魚鳧王は湔山に田して仙道を得た。蜀人は彼の爲に祠を立てた。」（華陽國志 蜀志）

という傳説が語られている。¹⁰⁾又望帝（杜宇王）の相として治水事業に力をつくし、後その功により位を讓られた叢帝（開明）には

「荆人鼈靈（令）は死體となつて揚子江を遡上し、望帝の都である郫に至つていきかえり、望帝と相見えて終にその相となつた。」¹¹⁾

という傳説が語られている。¹¹⁾これなどは、神仙思想の所謂る戸解と關係がありそうである。¹²⁾

次に後漢末にこの五斗米道と並んで大勢力を有していた太平道について見てみよう。

太平道は鉅鹿の人張角の創めたものである。しかし張角は瑯邪の人宮崇が、順帝の時に獻上した太平清領書——これは崇の師干吉が曲泉水の上にて得たといわれる——を得て、その教を完成したのである（後漢書卷三十下襄楷傳）。而してその範圍は青・徐・幽・冀・荆・楊・兗・豫の八州に及んでいる。こうして見て來ると、すでに陳寅恪氏も言っていることだが（「天師道與濱海地域之關係」集刊第三本四分 一九三一）現在の山東・江蘇一帶の沿海の地域と極めて關係の深いことが分る。¹³⁾又、前漢末に甘忠可なるものが出て、「天官歷包元太平經」（十二卷）を詐造したが（漢書卷七五李尋傳）、この甘忠可は齊の人である。一體齊には八神があり（漢書卷二五上郊祀志）、勃海中には三神山あり（史記卷二八封禪書）などと言われて、古來神仙思想と關係の深い土地といわれている。¹⁴⁾

こういった地方に、後漢末太平道や五斗米道が作られたことは、固有の地方文化との關係を豫想せしめるものがあると思ふ。¹⁵⁾

さてこれらの宗教は符水呪術による治病を目的としたものである以上、有識者・支配者階級からは、異端・邪教視されている。王符は言う。¹⁶⁾

「今、婦人多く中饋を修めず、その蠶織を休む。而して起ちて巫祝を學び、鼓舞して神につかう。以て細民を欺誣し、百姓を煖惑す。婦女羸弱疾病の家は、憂を懷きて憤々たれば、恐懼をなし奔走せしむるに至りやすし。すなわち時には正宅を去離し路側に崎嶇す。上漏下濕し、風寒の傷くるところ、姦人の利とするところ、賊盜のあつるところとなる。禍を益し祟を益し、もって重を致すものはあげて數うべからず。あるいは醫藥を棄て、さらに往きて神につかう。故に死亡に至るも自ら巫の欺誤するところとなるを知らず。かえつて巫につかうのおそきを恨む。これ細民を煖惑するの
はなはだしきものなり。」

又、時代は少し下るが晋の葛洪は次のように言っている。

「俗の謂うところは、おおむねみな妖僞なり。轉じて相い誑惑すること久しくしていよくはなはだし。すでに療病の術を修むるあたわす。又その大迷よりのがるあたわす。藥石の救をつとめずしてたゞ祝祭の謬を專にす。祈禱やむなく問卜して倦ます。巫祝の小人は妄りに『禍祟疾病危急は、唯聞かざるところ(に起る)』と説き、聞けばすなわち修して損費をなさしむ。不營の富室はその財儲をつくし、貧人は假りて倍息を擧げられ、田宅は割裂してもつて篋櫃を盡くすにいたり、倒装して餘りなし。あるいはたま／＼自らいゆることあれば、すなわち神の賜を受くといふ、もしそれ死亡すれば鬼に赦されずという。幸にして誤りていきるも財産は窮りつき、遂にまた飢寒凍餓して死す。あるいは起ちて刳剡となり、あるいは穿窬これ濫る。身を鋒鏑の端に喪い、自ら醜惡の刑に陷るは、みなこれによるなり。」(抱朴子内篇 卷九 道意)

五斗米道の教法についてはすでに幾多の研究があり、こゝでは觸れないが、まさしくこのようなものから出發している。¹⁷⁾
のである。¹⁸⁾

たしかに王符のような儒教の立場から見れば淫祀邪教であり、又葛洪のように正統神仙者流の立場に立つて見れば異端である。しかし彼等が非難するのはたんにこの點だけではない。宗教團體としての統一ある組織を與えた點に及ぶのであり、あるいはその點こそが最も非難に價する行爲であつたとも考えられる。²⁰⁾葛洪は續けて言う。

「さきに張角・柳根・王歆・李申の徒あり。あるいは千歳と稱し小術に假託す。坐せば在り立てば亡し、形を變え貌を易え、黎庶を誑眩し羣愚を糾合す。進みては延年益壽をもつて務となさず、退きては消災治病をもつて業となさず。ついにものつて姦黨を招集し、逆亂を稱合す。久しからずして自らその辜に伏せしも、あるいは良人を殘滅し、あるいは百姓を欺誘して、もつて財利を規り、錢帛は山積し富は王公を踰ゆ。奢淫をほしむにし侈服王食す。妓妾は室にみち管弦は列をなす。刺客死士はそのために用をいたし、威は邦君を傾け勢は有司を凌ぐ。亡命逋逃はよりて窟蔽となす。みな官が糾治せざるによりてもつてこの患をいたす。そのよる所をたずぬるに歎息をなすべし。」

と衆民を招集して逆亂をなすことを非難している。従つて妖賊などという言葉も使われるわけである。いま後漢書本紀中から妖賊について述べたと思われる記事を拾い出すと次のようになる。²¹⁾

陽嘉元年	132	楊州六郡妖賊章河等寇四十九縣殺傷長吏
建康元年	144	九江盜賊徐鳳馬勉等稱無上將軍攻燒城邑
永嘉元年	145	馬勉稱黃帝
" "		歷陽賊華孟自稱黑帝
建和元年	147	陳留盜賊李堅自稱皇帝
" 二年	148	長平陳景自號黃帝
" "		南頓管伯亦稱真人
和平元年	150	扶風妖賊裴優自稱皇帝

永興二年 154 蜀郡李伯詐稱宗室當立爲太初皇帝

延熹九年 166 沛國戴異得黃金無印文字遂與廣陵人龍尙等共祭井作符書稱太上皇帝

熹平中 172-177 妖賊大起 (三國志魏志卷八注引典略)

中平元年 184 鉅鹿人張角自稱黃天

巴郡妖巫張脩反寇郡縣

こうした中で五斗米道や太平道はもっともしっかりした組織を持っていた。太平道には三十六方ありと言われ(後漢書)、五斗米道には二十四治があったと伝えられている(雲笈七籤)。

ではどのような人達がこうした教團に入信して來たのであろうか。これはやはり一般農民層に求むべきように思う。彼等は豪族のあくなき土地の兼并や、國家の収奪のために「泥にまみれまっ黒になつて働いていた。しかも彼等は「草木で肢體の屈伸するもの、禽獸で形が人に似ているもの」と言われていた。その上に又、異民族の侵寇にも苦しめられている。今四川地方に限って言うと、羌族の侵入や、この地の原住蠻族の叛亂がある。前者の侵寇は王符もいつているように、涼・并兩州から次第にこの地に及んで來たので、二世紀以後のことであるが、後者は國初より叛服常なき有様であった。今後漢書本紀及び西南夷傳(卷八六)、西羌傳(卷八七)によってこれを表示すると左の如くなる。

建武一九年 43 西南夷寇益州郡

越嶲太守任貴謀叛²⁵⁾

武威將軍劉尙破益州夷平之

越嶲姑復夷叛州郡討平之

永昌哀牢夷叛

蜀郡三翼種夷與徼外汗衍種并兵三千餘人反叛攻鄧陵

	"	二年	108	先零羌寇三輔東犯趙魏南入益州
	"	四年	110	先零羌寇褒中
	元初元年		114	蜀郡夷寇蠶陵
	"			先零羌寇武都漢中絕隴道
	"	二年	115	先零羌寇益州
	"	四年	117	越嶲夷寇遂久
	"	五年	118	越嶲夷叛
	"			越嶲蠻夷及旄牛豪叛殺長吏
	"	六年	119	永昌益州蜀郡夷叛與越嶲夷殺長吏燔城邑
	延光二年		123	旄牛夷叛寇靈關
	永和二年		137	廣漢屬國都尉擊破白馬羌
	建和二年		148	白馬羌寇廣漢屬國
	永壽二年		156	蜀郡屬國夷叛
	延熹二年		159	蜀郡夷寇蠶陵
	延熹四年		161	健爲屬國夷寇鈔百姓
	熹平五年		176	益州郡夷叛
	光和二年		179	巴郡板楯蠻叛

こうした叛亂の鎮壓に驅り出され「徭役並び起つて農桑業を失う」(昌言 損益篇)状態で、その生活は一層苦しくなつたであろう。こうして窮乏した農民や、土地を失つて流亡した農民が救を求めて入信して來たであろう。

「この教團には疲役の民が多い」(後漢書卷七五劉焉傳、三國志蜀志卷一 二牧傳)とか、

「流亡してこの地にやつて來たもので、この教を奉じないものはない」(典略)

と言われていることがこのことを示しているのであり、黃巾の亂が起るやその原因及び對策として

「ひそかにおもひに、張角がよく兵を興し亂を作すゆえん、萬民のこれに樂附するゆえんはその源はみな十常侍による。彼等は多く父兄・子弟・婚親・賓客を放ちて、州郡に典據して財利を辜權し、百姓を侵掠し、百姓の冤は告訴するところなし。よりて角に従つて道を學び、不軌を謀議し相あつまりて盜賊となる。いまよろしく十常侍を斬り、その頭を南郊に懸けもつて百姓に謝すべし。」(後漢書卷七八張讓傳。全後漢文卷八二によつて一部補つた)という議論もなされるわけである。

こうした農民を中核としているこの種の教團が、反官・反豪族的な行爲に出るのは充分考えられることである。こゝで再び目を豪族の側に轉じよう。

四

巴蜀の地には古くから独自の文化が發達していたことは、ほとゝ推察されているが、この地が中國の版圖内に入つたのは紀元前四世紀の末、秦による巴蜀征服がなされてのちのことである。²⁵⁾ 恐くその頃の智識にもとずいて作られたと考えられる尙書禹貢には、²⁶⁾ この地を梁州と名づけ、次のように記している。

「華陽黑水は惟れ梁州……その土は青黎、その田はこれ下の上、その賦は下の中三錯、その貢は瑱鐵銀鏤砮磬、熊羆

狐狸織皮なり。」

ここに言う田、すなわちその土地から上る田租は七番目の下上、賦は第八番目の下中にランクされている。又その貢が、鑛産物及び皮革類に限られていることも注意される。その後秦及び漢はこの地に鹽・鐵・市・工官等をおき、又、徙民政策を取るなどしてこの地の開發につとめた。秦の李冰・漢の文翁などは灌漑工事や鹽井の鑿掘者として、その業績を半ば傳説化して傳えられている。又、卓氏、鄭氏、寡婦清の家などは、皆この地に徙され、鑛山の開發事業によつて富み榮えたのである（史記貨殖列傳）。商業貿易も亦盛んであつた。現在の四川・雲南・貴州地方に住んでいた所謂西南夷諸種族からは、僮や牛馬が買われた。そしてこの地の産物は、廣東方面に、又は印度を通して遠く中央アジアにまで傳わつていた（史記 西南夷傳・大宛伝）。されば

「巴蜀の民は、あるいはひそかに出でて商賈し、その窄馬犍僮牂牛を取る。こゝを以て巴蜀殷富なり」（漢書西南夷傳）などともいわれる。又、最近の考古學的研究の結果、朝鮮や北蒙古に、この地方の工官（漢代には蜀と廣漢に工官がおかれた）で作られた漆器が傳わつてることが明にされた。³⁰⁾こゝはまた有名な絹織物（蜀錦）の產地でもある。³¹⁾こうして巴蜀の地は「沃野千里天府之土。」「陸海。」「物産は豊富にして民に凶年の憂なし。」などと稱される物産の豊富な土地になつたわけである。晋代の常璩の著した華陽國志には

「土五穀を植え、牲六畜を具う。桑蠶麻苧、魚鹽銅鐵、丹漆茶蜜、靈龜巨犀、山雞白雉、黃潤鮮粉はみなこれを納貢す。その果實の珍なるものは樹に蒞支あり、蔓に辛茹あり、園に芳蒟香茗あり、客に橙葵を給す。」（卷一・巴志）

「その寶は則ち璧玉金銀、珠碧銅鐵、鉛錫赭堊、錦繡蔚釐、犀象氈毼、丹黃空青、桑漆麻苧の饒あり」（卷三 蜀志）とその産物を記し、又各郡縣の條にもその地の物産を擧げている。

さて、このようにして開發が進むにつれて、いわゆる豪門大姓の經濟的地盤が次第に築かれていったであらう。數字をそのまゝ信用するわけにはいかないとしても一畝から十五〜三十斛の收獲があるといわれる綿竹を始めとして、水田地帯

には、王褒の「僮約」に現わされているような莊園が形成されたであろう。³²⁾或は第二・第三の卓王孫・鄧通が出て冶鐵・銅山その他の鑛産物で富を得たであろう。又、鹽井の經營も忘れてはならない。巴郡の臨江を始め各地に鹽井が掘られていた。特に後漢では、和帝が鹽鐵の禁を廢止して後は自由に營業ができた。豪門大姓が鹽井を所有していたことは、

「豪門も亦鹽井を有す」(華陽國志 巴志臨江縣)

「大豪馮氏に魚池鹽井あり」(華陽國志・蜀志・廣都縣)

「鹽井・魚池百を以て數う。家ごとにこれを有す。」(華陽國志 蜀志 漢安縣)

とあることから分る。その外果樹園・茶・手工業・商業貿易等もあげられよう。

しかし經濟力に富むことだけが、直に大姓に連るものではなかった。そこには政治權力との密なる接觸が要求される。また逆に政治權力と結びつくことによって經濟力を一層豊にすることができると。

「世々部曲を掌りて大姓となつた」(華陽國志 巴志) のものや、「三世に渡つて郡官を領した」(華陽國志 南中志) もあることは、大姓と政治權力の關係を物語っている。

一體漢代の官制によれば、州の刺史、郡の太守・丞、縣の令長は中央から任命されたが、その屬官はみなその地方の住人から辟除している。中でも人事を仕る「功曹」や監察官である「督郵」は郡の極位とされていた(後漢書卷四五 張酺傳注引漢官儀)。またこうした地方の官職については、自然中央の官位に推薦される機會に恵まれるのである。³⁶⁾

さて辟除をなすさいには、原則としては、家柄などにとらわれず善士を選ぶべきである。もっとも

「夫れ選用には必ず善士を取る。善士は富めるもの少くして貧しきもの多し。祿はもつて供養するにたらず。いずくんぞ少しも私門を營まざることあたわんや。」(昌言 損益篇)

という状態であつた。しかしこれは貧しい善士を選用すべきでない、ということを主張しているのではない。このように官吏の待遇をわるい状態にしておくことは「機を設け、わなをにおいて、天下の君子を待つこと」(同右)で甚だ恥すべきこ

と、従つて改むべきことだと言っているのである。英俊賢行廉潔の士こそ選ばれるべきものであったのである。しかし、實際には族姓閥閥が論ぜられる有様であった。仲長統は天下の士に三給ありといつて、この點を第一にあげている。（昌言雜篇）

又王符は

「羣僚の士を擧ぐるや、或は頑魯をもつて茂才に應じ、桀逆をもつて至孝に應じ、貪婪をもつて廉吏に應じ、狡猾をもつて方正に應じ、諛諂をもつて直言に應じ、輕薄をもつて敦厚に應じ、空虚をもつて有道に應じ、囂閥をもつて明經に應じ、殘酷をもつて寬博に應じ、怯懦をもつて武猛に應じ、愚頑をもつて治劇に應ず。名實相副わす、求と貢と相稱わす。富者はその財力に乘じ、貴者はその勢要に依る。錢多きを以て賢となし、剛彊をもつて上となす」（潜夫論卷二

考績第七）

といつて、貢擧が正しく行われていないのを歎いている。地方長官も彼の政治を圓滑に行うためには、その地の有力者を任用するの利を知つていたのであろう。

こうして大姓・冠族などと呼ばれるものが、徐々に形成されていったのである。所で華陽國志には各郡縣の條に豪族の姓を列擧するとともに卷十には先賢士女惣讚として、蜀漢時代に至るまでのこの地で活躍した人士の事蹟を、蜀郡・廣漢・犍爲・漢中・梓潼の各地に分けて記している。巴郡出身の人達の分も當然あつた筈だが、これは缺けている。しかし、卷十二に「梁益寧三州先漢以來士女目錄」があるのでそれで補うことができる。

そこでこの中から官吏になつたものを取り出してみた。

また隸釋卷五に「巴郡太守張納碑」がのせられている。この碑は中平五年（一八八）三月に建てられたものである。所でこの年は又、劉焉が益州牧となつた年なのである。所で洪适は「益州從事李元以下が各々曹掾の職を書して故吏を稱していないから、この碑は張君在郡の日に立てられたものである。」と言つてゐる。

さてこの碑陰には、七十四人の名が記されている。その中の出身地不明のもの一人、姓の不明なもの十二人を除いて他の六十一名は、その職と出身地が分っている。

そこでこれら華陽國志に出てくる人々と、張納碑に記された人々とを、華陽國志の豪族の一覽に比較してみると次のような結果を得る。(○印は「張納碑」碑陰の人名である。なお時代は一應後漢末劉焉入蜀以前に限った。又、巴郡以外の、蜀・廣漢・犍爲・漢中・梓潼の諸郡は、紙面の關係もあり、郡治のおかれた縣のみにした。)

この表から得られる結論を簡単に述べてみると、張納碑中の人物、六一名中の約三分の一に當る二十名が華陽國志の大姓中に檢出される。³⁸⁾そして此等の大姓は、私が問題としてきた後漢末の大姓・豪族に外ならぬものであつた。更にこれらの階級こそは言わば五斗米道からの攻撃の的になっていたのである。これに對しては豪族側もその利益を守る對策を立てねばならない。そこに劉焉擁立の動きも出てくるわけである。併し劉焉の政治思想は、必ずしも益州大姓の希望と一致するものではなかつた。そこに蜀漢國成立に至るまでなお約三十年に渡る政治的混亂の期間を経ねばならなかつた。この問題については稿を改めて考察したい。

縣	姓	名	士
成都縣	柳 杜 張	柳 宗	州郡右職・陽夏太守
	張 霸	張 寬	楊州刺史
	張 楷	張 超	會稽太守・議郎・侍中
	張 陵	張 陵	聘士
		尚書	〃
		自陵之後 世有大官	

武 雒

陽 縣

楊 翟 郭 李 鍾 楊 郭 趙⁴¹⁾

楊 翟 郭 郭 李 李 李 楊 楊 楊 楊 楊 楊 趙 趙 趙 趙 趙 張 張
 渙 酺⁴⁶⁾ 賀⁴⁵⁾ 堅⁴⁵⁾ 勝 充⁴⁴⁾ 尤⁴⁴⁾ 由⁴³⁾ 班 終⁴²⁾ 統 竦 壯 溫 謙 典 戒 定 遼⁴⁰⁾ 玄³⁹⁾

車騎將軍

郡守 蜀人、伯鸞所拔皆致郡守失其官名

以遊俠稱

歷司徒太尉登特進

三爲侍中 八俊

歷位卿尹爲太尉

侍中 司空 司徒

尙書郎

從事

二千石失其官（竦の子）

校書郎

不韋茂陵令徙西城關中令

郡文學掾

諫大夫 樂安相

尙書郎（尤の孫）

東觀郎

烏丸校尉

戶曹主簿 侍中 尙書令 僕射 司隸校尉 荊州刺史 河南尹

議郎 侍中 尙書 酒泉太守 京兆尹 光祿大夫 將作大匠

歷臺郎相稍遷尙書中郎司隸校尉

梓
潼
縣南
鄭
縣

文

趙

程

李 李

文瀨(齊)

趙
嵩趙
琰₅₃₎趙
瑤趙
宣程
基程
信程
苞李
法₅₂₎

李文姬

李
歷李
燮李
固₅₁₎李
邵₅₀₎李
頡₄₉₎李
光₄₈₎楊
莽楊
進₄₇₎楊
準楊
仲穎楊
穎伯楊
文方

漢中太守

冀州刺史

二千石

失其行事也

河南尹

司隸校尉

將作大匠

主簿

城門校尉

健爲屬國都尉

益州太守

鎮遠將軍

廣漢太守

青州刺史

察孝廉

健爲太守

南郡太守

功曹

五官

上計吏

侍中

光祿大夫

汝南太守

司隸校尉

新城令

議郎

安平相

議郎

河南尹

郡侯吏

功曹

察孝

尚書

左丞

尚書僕射

尚書令

司空

司徒

江
州
縣

常程	上官	白楊愷	然謝	毋鈇波鄧雍	景														
	○上官旦	○上官延	○白文		○然雄	○然存	然温		○毋龜	○毋成	○鈇遷		景鸞 ⁵⁵⁾	景顧	景毅	文極	文悫		
	領校安漢長	議曹掾	主簿		賊曹史	行丞事從掾位	桂陽太守		辭曹史	文學掾？	文學史		功曹	李膺に師事（毅の子）	武都令 益州太守	王堂の妻 ⁵⁴⁾	北海太守（瀨の子）		

平都縣	南充國縣	安漢縣
殷	呂	蔡
侯	譙	勾
趙		
瓊		
上計掾		

〔補註〕

①守屋美都雄「六朝門閥の一研究——太原王氏系譜考——」(『東洋大學學術叢書』一九五一)

矢野 主税「張氏研究稿——張良家の歴史——」(『長崎大學社會科學論叢』第五號 一九五五)

なお矢野氏は、張氏の開祖を張良を通して、開地まで溯上らせていられるようだが、やはり確實な所は後漢頃に置くべきように思う。

第一に張良は、漢高祖の宰相として活躍した人物であるとともに、又彼には「願わくは人間のことをすて、赤松子の游に従はんのみ。」といった辟穀・道引・輕身を學んだという傳説があり、黄石公に兵法を學んだという話と共に、頗る道家的性格の強い人物であり、王氏が太子晋(王子喬)にその祖を結びつけた際に「逸民を好む後漢の風」(『守屋』一頁)に影響されたと言われるが、張良はこの點からも、開祖に戴くに最も適した人物である。

第二に、張皓が張良の六世の孫とも、又八代、九代とも言われるのは(矢野氏前掲書三頁註③)、年代の辻褄を合わせる工作のあとであろう。

第三に、張翼は張皓の四代の孫であるが、後漢書より先にできた三國志蜀志卷一五の張翼傳には

「高祖父司空浩、曾祖父廣陵太守綱、皆有名迹」

とあるだけで張良がその祖先であることが記されていないことである。張翼が張良の子孫なら當然その旨が書かれている筈である。

②「塙」はこの時代の豪族の作った自衛組織である。塙については那波利貞「塙主考」(『東亞人文學報』二卷四號 一九四三)がある。

それと共に注意すべきは後漢書劉表傳に見える「宗賊」ということである。劉表が初平元年(一九〇)に荊州牧となったとき江南では宗賊が盛んであったのである。この宗賊については、唐の章懷太子李賢が「宗黨ともに賊となる。」と注した。その後資治通

鑑に注した胡三省も賢の説をそのまゝ採用した。所が清朝に入つて何焯は義門讀書記の中で「宗は巴賁の賁と同義で南蠻の號である」(後漢書卷三)と述べた。これに對して惠棟は何焯の説にはにわかに賛成しがたいとして、「吳志注引江表傳」を引用して「けだし漢末喪亂し人民結聚して郡縣を劫略す。下より言えば宗部宗伍であるが上より言えば宗賊となす」(後漢書補注卷一七)といった。何焯の説には聴くべきものがあるように思うが、なおその地域などに疑問の點もあり、惠棟の説が正しいように思う。宗賊はやはり、宗族を中心に形成された自衛組織と解してよいように思う。なお宗賊については最近

趙儷生・高昭中「一國農民戰爭史論文集」(新知識出版社 一九五五)中に「『宗人』與『賁人』なる一文及び

唐長孺「孫吳建國及漢末江南的宗部與山越」(魏晉南北朝史論叢所 取 三聯書店 一九五五)がある。

③後漢王朝が地方政治安定の爲に制定した牧伯制度も、結果的に見れば地方豪族と牧伯の關係が、前者の勢力が無視し得ぬものであった爲に分裂を促進することになってしまった。すでに後漢書の著者范曄は

「州任之重、自此而始」(後漢書卷七五劉焉傳)といひ、清の何焯は

「州任重而土地分裂、卒成鼎足之運」(義門讀書記 後漢書卷三)といっている。

④魏晉の交代の際にも、司馬氏が豪族の支持を得たことが、晉の成立に大きな關係を有していると思われる。

⑤四世五公を誇つた袁氏が、宦官をその祖に持つ曹氏に破れたといふことも、この二・三世紀の間の變化を象徴する様に思う。勿論袁氏の没落には袁紹と袁術が互に敵對したことも一つの理由として數えられるであろうが、次の記述は當時の袁氏に對する評價を示している。

「先主曰、袁公路(術)近在壽春、此君四世五公、海內所歸、君(陳登をさす)可以州與之、登曰、公路驕豪、非治亂之主、……孔融謂先主曰、袁公路豈憂國忘家者邪、冢中枯骨何足介意、……」(蜀志卷二先主傳)

この語は徐州牧陶謙が東海の豪商糜竺の言により、彼の死後、劉備に徐州を預けることに同意し、陳登が使者になつて備の下に赴き、徐州を袁術に譲らんとする備を説き伏せる時に發せられた語である。

⑥以上の拙論は前に記したものの外左に掲げるものによつた。

青木 正兒「支那文學思想史」(岩波書店 一九四三)

宇都宮清吉「漢代社會經濟史研究」(弘文堂 一九五五)

大淵 忍爾「中國における民族的宗教の成立」(歴史學研究 一七九・一八一號 一九五五)

岡崎 文夫「魏晉南北朝通史」(弘文堂 一九三三)

「魏晉南北朝における社會經濟制度」(弘文堂 一九三五)

狩野 直喜「中國哲學史」(岩波書店 一九五三)

川勝 義雄「シナ中世貴族政治の成立について」(史林 三十三卷 第四號 一九五〇)

「曹操集團の構成について」(人文科學研究所二十五周

年紀念論文集 一九五四)

内藤虎次郎「支那繪畫史」(弘文堂 一九三八)

"「中國中古の文化」(弘文堂 教養文庫 一九四七)

宮川 尙志「諸葛孔明」(富山房 一九四〇)

"「三國吳の政治と制度」(史林第三八卷第一號 一九五

五)

森三樹三郎「魏晉南北朝における人間の發見」(東洋文化の問題

第一號 甲文社 一九四九)

"「六朝士大夫の精神」(大阪大學文學部紀要 第三卷

一九五四)

吉川幸次郎「三國誌實錄」(二)(世界 一九五六年三月號)

米澤 嘉園「漢代の繪畫に於ける勸戒主義と畫家」(東方學報 東

京 第九册 一九三九)

"「中國古代の繪畫」(平凡社 世界美術全集7 中國I

一九五二)

曾 馨「三國時代的社會」(食貨第五卷十期 一九三七)

徐德麟「三國史講話」(羣聯出版社 一九五五)

⑦政治・文化の變化を述べながら、下部構造のそれについては一言も触れなかつたのは、正直な所、部曲・客と呼ばれるもの、或は均田農民等をどう扱うべきかよく分らないからに外ならない。たゞ現在の所彼等は古代の奴隸とは異った性格を有するものと解すべきではないかと思つてゐる。

⑧是時、劉璋爲益州牧、外有張魯寇侵、(周)瑜乃詣京見(孫)權曰、今曹操新折衄、方憂在腹心、未能與將軍道兵相事也、乞與奮威俱

進取蜀、得蜀而并張魯、因留奮威固守其地、好與馬超結援、瑜還與將軍據襄陽、以蹙操北方可圖也、(三國志・吳志卷九 周瑜傳)

⑨獻帝春秋には前引の語について次のように言つてゐる。

備欲自圖蜀、拒客不聽曰、益州民富彊、土地險阻、劉璋雖弱、足以自守、張魯虛僞、未必盡忠於操、今暴師於蜀漢、轉運於萬里、欲使戰克攻取舉不失利、此吳起不能定其規、孫武不能善其事也……今同盟無故自相攻伐、借糧於操、使敵承其隙、非長計也。權不聽、遣孫瑜率水軍、住夏口、備不聽、軍過、謂瑜曰、汝欲取蜀、吾當被髮入山、不失信於天下也、使關羽屯江陵、張飛屯秭歸、諸葛亮據南郡、備自住涪陵、權知備意、因召瑜還。

⑩後漢書卷八二上方術傳に

「王喬者河東人也、顯宗(明帝)世爲葉令、喬有神術、每月朔望、常自縣詣臺朝、帝怪其來數而不見車騎、密令大史伺望之。言。其臨至輒有雙鳧、從東南飛來、於是候鳥至、舉羅張之、但得一雙鳧……或云此即古仙人王子喬也」

という話が見える。風俗通卷二にも「葉令祠」と題してこの話が見える。その最後が「僊人王喬者也」となつてゐるのを除いて内容は同じである。王喬と王子喬については、いろ／＼問題もあらうが(守屋 前掲書頁八一九)、とにかく鳧は仙人の履と考えられてゐるのである。

⑪後漢書卷五九張衡傳注、文選卷一五思立賦注、太平御覽八八・九二三などに引かれた蜀王本紀に見える。なお楊雄蜀都賦(古文苑卷四引)にも

「昔天地隆生杜鄴密促之君則荆上亡尸之相」

とある。

⑫戸解については

津田左右吉「神僊思想に關する二・三の考察」(滿鮮地理歴史研究報告 第十一 一九二四)

⑬なおこの點は

李光璧「漢代太平道與黃巾大起義」(中國農民起義論集所收歷史教學月刊者編 一九五四)
にも見える。

⑭津田 前掲書

森三樹三郎「支那古代神話」(大雅堂 一九四四)

⑮神話傳說その他種々の點から、古代において、揚子江流域から山東にかけて、黄河文化圏と對立する一大文化圏が存在していたと考えてよいのではないかと思つてゐる。

⑯潛夫論卷三 浮修篇第十二

なお四部叢刊本と後漢書王符傳所載のものとは多少語句に出入がある。今は四部叢刊本により、後漢書を参照した。

⑰五斗米道並に太平道についての研究は既に掲げたものゝ外、

板野長八「道教成立の過程」(東亞論叢第五輯 一九四一)

太淵忍爾「太平經の來歴について」(東洋學報第二十七卷第二號 一九四〇)

⑱

「太平經の思想一斑」(東洋學報第二十八卷第四號 一九四一)

⑲

「太平道の發生と五斗米道」(加藤博士還曆記念東洋史集說 一九四一)

小柳司氣多「後漢書襄楷傳の太平清領書と太平經との關係」(東洋

思想の研究所収 一九三〇)

酒井忠夫「三張の道教と西藏族」(史潮第七年第一號 一九三七)
⑯後漢書卷七五劉焉傳・三國志魏志卷八張魯傳及び典略の原文のみあげておく。(一)内は後漢書。

「其來學道者初皆名鬼卒、受本道已信號祭酒各領部衆、多者爲治(理)頭大祭酒、皆教以誠信不欺詐、有病自首其過、大都與黃巾相似、諸祭酒皆作義舍、如今之亭傳、又置義米肉懸於義舍、行路者量腹取足、若過多鬼道輒病之、犯法者三原然後乃行刑、不置長吏、皆以祭酒爲治(理)」

「典略曰……………加施靜(淨)室、使病者(人)處其中思過、又使人爲姦令祭酒、祭酒(此の二字無し)主以老子五千文使都習、號爲(此の字無し)姦令爲鬼吏、主爲病者請禱(此の二字無し)請禱之法、書病人姓名(字)說服罪之意、作三通、其一上之天著山上、其一埋之地、其一沉之水、謂之三官手書、使病者家出米五斗以爲常、故號曰五斗米師……………教使作(起)義舍以米肉(この字なし)置其中、以止行人、又教(この字なし)使自隱有其(小)過者、當治(循)道百步則罪除、又依月令春夏夏禁殺、又禁酒」
⑰義舍を建て、義米・義肉をそこに備えておくといった社會事業的な面があるが、それはこの教が他の同種のものより進んでいることを示すもので、本質は「鬼道」なのである。

⑱岡崎文夫「魏晉南北朝通史」外篇五三六頁。

⑲妖賊とはつきり記されていないが、賊の自稱などからそうであると推定されるものも採録した。例えば建康元年の條の九江盜賊徐鳳らが稱した無上將軍という稱號は、中平五年になって黃巾の賊もこれを稱している。

又、妖賊が順帝の時代に始まり、その地域がほぼ沿海地域であることも注目される。

②「井田之變豪人貨殖、館舍布於州郡、田畝連於方國、身無半通青綸之命、而竊三辰龍章之服、不爲編戶一伍之長、而有千室名邑之役、榮樂過於封君、勢力侔於守令、財賂自營犯法不坐、刺客死士爲之投命、至使弱力少智之子被穿韓敗寄、死不斂冤枉、窮固不敢自理、雖亦由禁網疎濶、蓋分田無限使之然也」(昌言 損益篇)

「豪人之室、連棟數百膏田滿野、奴婢千群徒附萬計、船車賈販周於四方、廢居積貯滿於都城、琦賂寶貨巨室不能容、馬牛羊豕山谷不能受」(昌言 理亂篇)

③「博徒見農夫、戴笠持耨、以芸蓼茶、面色黧黑、手足胼胝、膚如桑朴、足如熊蹄、蒲望隴畝、汗出調泥、乃謂曰、子舐熱耕芸、背上生鹽、脛如燒椽、皮如領革、雖不能穿、行步狼跋、蹄戾脛酸、謂子草木支體屈伸、謂子禽獸形容似人、何受命之薄、稟性不純」(崔駰 博徒論 全後漢文卷四四)

④「羌虜背叛、始自涼并、延及司隸、東禍魏趙、西鈔蜀漢、五州殘破、六郡創迹、周廻千里、野無孑遺、寇鈔禍害、晝夜不止、百姓滅沒、日月焦盡」(潛夫論 救邊第二)

⑤「建武十四年……越蜀人任責自稱太守、遣使奉計」(後漢書卷一下光武本紀)

⑥私の見た範圍では、三國志宋紹熙本は疫役に作るが、萬曆二四年南京國子監本、竹簡齋石印本は疾疫に作っている。何れが正しいかよく分らないが、宋本に疫役に作っている点及び彼等が叛亂の主體となっていることから、疫役の方を取った。なお抱朴子には「後有一人、姓李名寬、到吳而蜀語、能視水治病頗愈、於是遠

近竊然……於是、避役之吏民、依寬爲弟子者、恒近千人」(道意)

とある。祝水治病をよくする李寬のもとに集つたものは避役の吏民であつたのである。

⑦中日戦争中、學術機關の中心が四川に移るとともに、この地方の考古學的研究が盛に行われた。

「說文月刊」(第三卷四期) 巴蜀文化專號(一九四二)
Richard C. Rudolf in Collaboration Wen Yu; Han Tomb Art of West China—A collection of First and Second-Century Reliefs (University of California Press 1950)

なお戦争中の研究成果の概要は
森 鹿三「最近に於ける中國學界の動向」(東光 第二號 一九四七)

水野清一「東亞考古學の發達」(大八洲出版古文化叢刊 一九四七)に紹介されている。なお
東世徵編「中國通史參考資料選輯」第一集 原始時代(新知識出版社 一九五五)中には

鄭德坤「四川古代文化史」(西華大學博物館 一九四六)の一部が引かれている。

⑧秦の巴蜀征服の年代については

大庭 脩「秦の蜀地經營」(龍谷史壇 第三三號 一九五〇)
⑨禹貢製作の年代については

内藤虎次郎「禹貢製作の年代」(研幾小錄 所収 東亞經濟研究六

卷一號 一九二二

宮崎市定「支那古代賦稅制度」(上) (史林十八卷二號 一九三三)。

③⑨ 内藤虎次郎「樂浪遺蹟出土漆器の銘文」(藝文第十七卷第一號 一九二六)

梅原未治「漢代漆器紀年銘文集録」(東方學報 京都第五冊 一九三四)

③⑩ 蜀錦生産の初つた時期については

中山八郎「唐末までの蜀錦生産」(一橋論叢 第三二卷第四號 一九五四)

③⑪ 宇都宮清吉「僮約研究」(漢代社會經濟史研究所収)

③⑫ 文獻通考卷一五征權考、鹽鐵には

「和帝即位罷鹽鐵禁 詔曰……………先帝……………復收鹽鐵、

欲以防備不虞、寧安邊境、而吏多不良、動失其便、以違上意、

先帝恨之、故遣戒郡國、罷鹽鐵之禁、縱民煮鑛、入稅縣官、如

故事……………」

とあり、それ以後鹽鐵の專賣を復したことは見えていない。

③⑬ 漢代には巴郡・朐忍・魚復兩縣には橘官がおかれていた。

③⑭ 武陽・南安・涪陵は茶の産地であつた。王褒の僮約に出てくる奴

隸便了は、武陽に茶を買いに行かされている。

③⑮ 漢代の官吏登用の制度については

勞餘「漢代察舉制度考」(集刊第一七本 一九四九)

江幡貞一郎「西漢の官僚階級」(東洋史研究第十一卷第五・六號

一九五二)

鎌田重雄「漢代の孝廉について」(史學雜誌第五十五卷第七號 一

九四四)

五井直弘「後漢時代の官吏登用制『辟召』について」(歴史學研究

一七八號 一九五四)

濱口重國「漢代の孝廉と廉吏」(史學雜誌第五三卷第七號 一九四

二)

③⑯ 華陽國志卷十「先賢士女惣讚」の最後に

「二州人士自漢及魏二百四十八人而已」

とあるが、蜀郡以下の人士は、百九十四人である。五十四名ばかりの巴郡の士女があるべきことはこの點からも言える。

③⑰ この外

「守屬 充國 誰將」

の名が見える。この誰は南充國縣の大姓譙の誤ではないだろうか。

又、張納碑には宕渠縣出身者の者がある。宕渠縣の條には大姓

の記載はないが「梁益寧三州先漢以來士女目錄」には、藏・玄・

龐・馮・李・趙・曲・王といった姓が見えている。この姓と同姓

の人物を張納碑から挙げると次のようになる。

士女目錄

張納碑

藏 藏大伯 公車令

藏卒 獻曹史

玄 玄賀 大司農

龐 龐雄 大鴻臚

馮 馮煥 幽州刺史

馮譽 從掾位

馮 馮混 車騎將軍

馮元 (後漢書三八に傳あり)

馮遼 降虜都尉

馮遵 尙書郎

馮湛 宕渠主簿
李 李温 桂陽太守

李元 益州從事

李思 議曹掾

李竝 從掾位

李含 戶曹史

李平 守屬

趙 趙芬 戶曹掾

曲 曲庾 宕渠主簿

曲胤 賊曹史

王 王平 鎮北大將軍

王安 決曹史

(三國志蜀志十三に傳あり)

王褒 左金曹史

これと同様なことは

江州縣

張紹 文學掾?

張南 右集曹史

謁煥 汝南太守

謁恭 守屬

閬中縣

王澹 茂才

王湯 南部督郵

周舒 徵士

周藐 文學掾

周羣 儒林校尉

(三國志蜀志十二に傳あり)

周臣 博士

楊仁 治中從事

楊地 從掾位

(後漢書七九下に傳あり)

らがある。

その他出身地名のものとして

「文學主事掾 任穆」

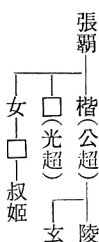
がある。任氏は閬中縣の大姓である。

なお蜀姓については

宮川尙志「六朝史研究 政治・社會篇」(日本學術振興會 一九五六)

中に一篇がある。

③張霸、陵の關係は次の通りである。なお後漢書三六に張霸の傳がある。



④蜀人とあるだけで何縣の出身かよく分らないが、柳宗に推薦されたと見えるから假にここに入れておいた。

⑤趙氏の家系は次の通りである。なお後漢書二七に趙典の傳がある。

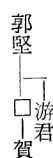


⑥後漢書四八に傳あり。

⑦後漢書八二に傳あり。

⑧後漢書八十上に傳あり。

⑨後漢書二六蔡茂傳によると

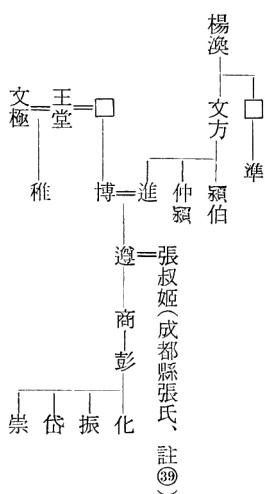


となり、祖父及び伯父は「並修清節不仕王莽」とある。

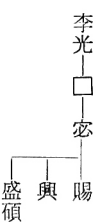
⑩後漢書四八に傳あり。四世傳詩の家柄であった。

⑪楊氏の家系は次の通りである。又楊進が嫁いだ王氏は郾縣の大姓

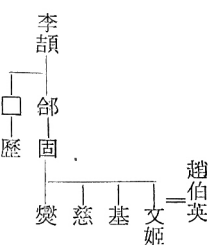
であるので、序にその系圖も出しておいた。王堂は後漢書三二に傳があり、王商は劉焉・璋の時代に活躍した。王甫は三國志蜀志十五楊戲輔臣贊中に傳がある。



④⑤ 彼の家系は次の如くである。



④⑥ 李氏の家系は次の通りで新唐書卷七二上世系表上にも見える。なお文姬が嫁いだ趙氏は南鄭大姓の一である。

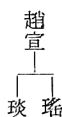


⑤⑦ 後漢書八二下に李邵の傳あり。

⑤⑧ 後漢書六三に李固父子の傳あり。

⑤⑨ 後漢書四八に李法の傳あり。

⑤⑩ 趙氏の家系は次の通り。



⑤⑪ ④⑦ 参照。

⑤⑫ 後漢書七八下に景鬱の傳あり。

⑤⑬ 後漢書八二上に任文公の傳あり。それによると文公は文孫の子となつてゐる。

⑤⑭ 陳氏の家系は次の通りである。

陳禪—澄—□—實（後漢書實に作る）
後漢書五一に陳禪傳あり。

附記

本稿は昨年二月史學研究會例會において「劉備の入蜀」と題して行つた發表の一部である。本稿作成に當つて宮崎教授より懇切なる御教示を賜つた。こゝに厚く御禮申しあげます。

— 一九五七・一・二八 —

The Role of Ssu-ch'uan in the Politics of Later Han

Naosada Kano

The Ch'in-Han period was a period of unification, while the period of the Wei-Chin and Northern-Southern dynasties was that of disruption, and the turning point from the former to the latter will be found in the second and third centuries, A.D. In Pashu or the present province of Ssu-ch'uan, which was a wealthy country, there were numbers of powerful clans, which were closely connected with influential figures in the central government. On the other hand, in the same province a mighty religious organization called Wu-tou-mei-tao, which was originally magical in nature, sprang up, and grew into an anti-government and anti-clan organization of peasants. To suppress this powerful peasant movement the clans had to organized themselves, leading to the creation of the Shu-Han dynasty.

The Political Influence of Confucian Scholars in the beginning of the Han Dynasty

Osamu Kanaya

With the creation of the Han dynasty and resultant pacification of the country the "sword" was being gradually replaced by the "pen." The role of Confucian scholars who became political advisers of Kao-tsu, founder of the dynasty, must be taken into account in connection with this tendency. Hitherto the influence over Han politics of Taoism seems to have been over-emphasized, while the role of these Confucians has been underestimated. Lu Chia and Lou Ching were such Confucians. Though the former seems to have been somewhat under influence of Taoistic thought and the latter in favour of the Legist school, they were Confucians in the essentials of their thought, and contributed to the establishment of a new political philosophy to meet the needs of the times.